擁書漫筆　二

イ 5
55
2

門 イ 曽5
號 45
巻 2

# 擁書漫筆巻第二

(一) 石山寺縁起画詞
○旅の御假屋ノ圖　○踏歌の水驛
○飯驛　○莖驛
○水驛の人　○路津ノ水驛
○涙驛　○すやさまこと云俗語
(二) そてまゆりほす麦の穂
○泊木　○稲機並圖
○希婦の細布
(三) 所尊光が詩歌

四 相摸國築井縣土屋村蛭ヶ嶽の黒尊佛并石像
○拘盧尊佛 ○大山の石尊
○鄭昝 ○桂川地藏記
五 釋了阿ヶ歌
六 橘千蔭ヶ俳諧歌
七 下野國宇都宮まて瞽女おうたふ謡
○ちとしと音のかよふ例 ○女を御とよふ事
八 蒲生秀實ヶ詩歌
九 糟谷容齋とふこてよめる歌
十 大田覃と大窪行ヶ聯句の詩
十一 ねんぞろぶのくおんとむろひとふ俗語
○てかゞみの神 ○蝦蟇衣
○大菓子
十二 うすとやよといふ俗語并丹田山紬
十三 太秦牛祭画詞并圖
十四 左姫右姫といふ事
十五 ひのえめぐく小唄といふ俗語
十六 大和國唐招提寺金堂の鴟尾の銘
十七 京都空也堂の叩鐘の銘
○津の國伊丹まうりの鋳物師村
十八 盃のみりひざしと云詞
○ねりひどり ○よめどり

○なそひおくし　○中呑
○はけざし　○辻酒盛
○すて盞　○十度呑
○まはり酌　○とおなとしの盞
○鶯呑　○ひと露
○一文字　○山桃呑
○梅花の盞　○三星の盞
○盞を下る小なして酒を盛らぬ事
○鸚鵡がへしの盞　○順杯
○乱杯　○ちぬ呑
○おこと呑　○一口呑

○梅の花呑　○露なし
○うちふり　○ふり杯
○そばざし　○ひらだし
○ちがへざし　○
○下戸の建たる蔵もなし

十九 海野蠖齋が詩
二十 宮本嵺が詩
廿一 宮澤逵が詩
廿二 磐瀬百樹が詩
廿三 片倉鶴陵が奇児羊之助が話
○桃郎傳
○神童猪良堅

⑭ 岸本由豆流が歌
⑮ 源躬弦が歌
⑯ 喜多村節信が詩
⑰ 禅林類聚 并 四書管蒼集
⑱ 篆隷萬象名義
⑲ 雛遊雛道具 并 木偶の神馬
⑳ 相撲國鎌倉郡瀬谷村妙光寺の鐘銘 ○ 日蓮聖人一宿の道場 ○ 釋迦牟尼佛氏 ○ 深見神社



# 擁書漫筆巻第二

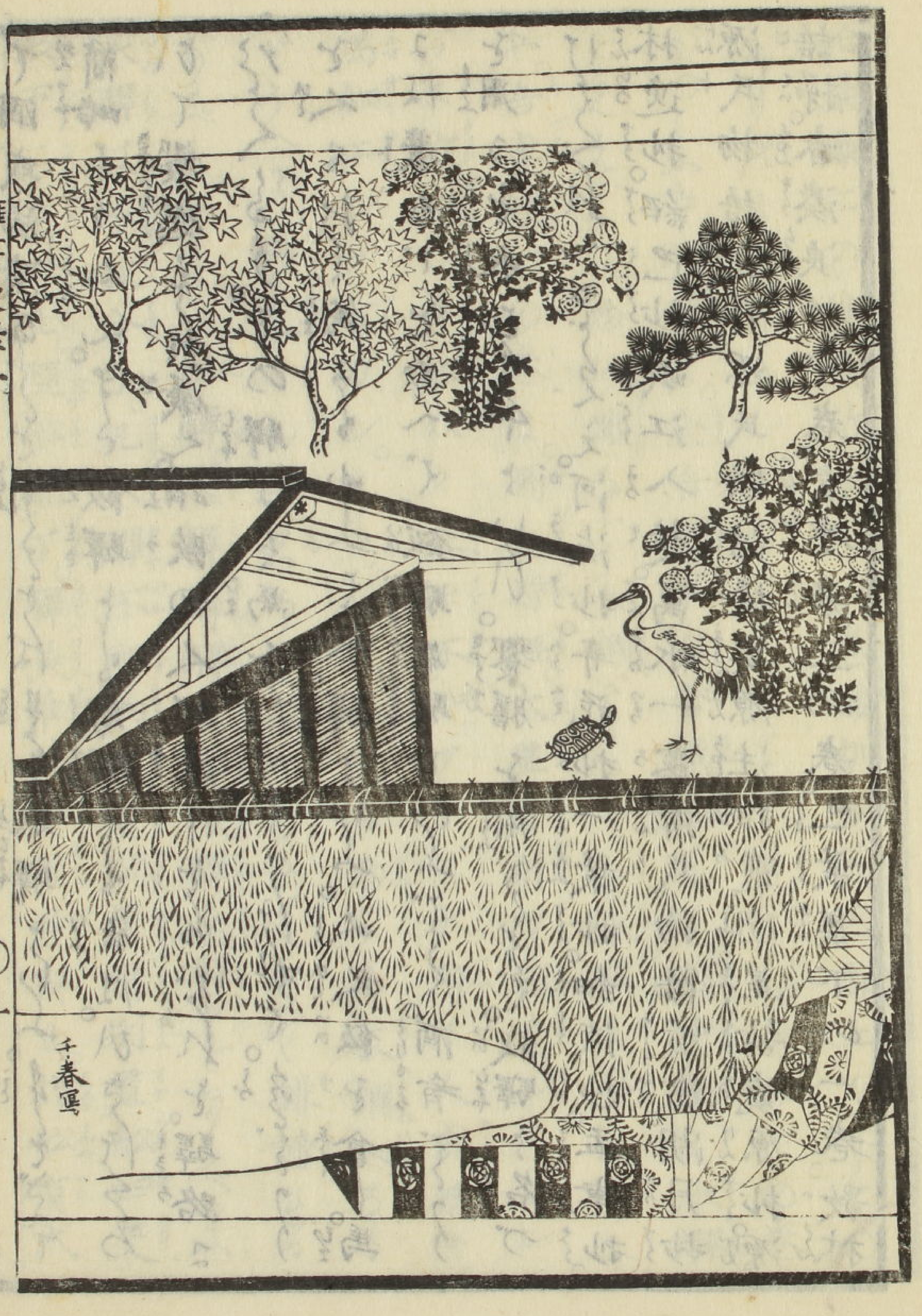
高田與清文儒著

石山寺縁起の画一の巻に旅の假屋のかたあり。そは松楓菊などうゑ。鶴亀のかたをもつくりなどしつらひけるさまなり。宇治相國高野参詣記。永承三年十月廿日の條に遅明著御鳥飼御牧之邊。丹波守章信朝臣奉仕御儲。渕渚栽小松汀引幔為御船寄處。赤岸上作假屋。儲諸大夫饗御膳兼上達部殿上人儲。自贄殿令供次々饗饌也。自雖同他國其儲甚豊贍とみえしも是なり。後鳥羽院熊野御幸記には昼養假屋所などあり。飯驛の儲ともいふべくや。踏歌の飯驛水驛も。これよりいひ出たるにや。そもそも踏歌の水驛は。源氏物語初音のまき。あるじはわざと

こゝろあり云云。朱雀院きさいの宮の御かくれおはしまし
けるほどは。秋もやうやうあけゆけば。みなむすびやまでこと
そなたのよべをば例あるおほよりほかにさかしうよく
なへて。いとしくりてもやをせなん。まれ往のそこに。こち
らは水むすびやありけれど。けふはすぎもしく
ころげさうして。かなしかあることあれしなどのこゝろもし
るさま。あまた用意ありて。竹川の末に。ひきさし矢て
うつろひど。うつむすやまで枝かけよろよてまうかけるを。
夫木抄春部一。光明峰寺入道摂政の歌に踏歌の心を。九と
れどこのころも水かけぬる竹川の水はうけもとまらじ。
源光行海道記。橋本の宿に泉に。おもて驛中の贈答八。ゐ

所に儲られ。誰か水路の跡をしらん。花鳥餘情初音の巻
に。李部王記延長七年正月。踏歌人踏歌。西行東行。又西行
列立。袋持取綿詞吹還入。更入置御前。此度水驛也。自注に。
唯進湯漬又用援器。同記云天慶五年正月十四日。参康子
内親王所。陪梨景殿。仍被綿。自注に。侍女授之後。設饗。水驛
也。更詣昭陽舎設盤餼。飯驛也。同記云天暦四年正月十四
日。参中宮。至于賜饗。水驛也。又侍院侍。須臾上皇還御寝殿。
踏歌畢賜饗。飯驛也。九條右丞相記承平四年正月十一日。
踏哥飯驛水驛被定之。中宮飯北宮水。今宮飯許左大臣宿
所飯。右大臣宿所水。右大将宿所飯云云。今案に水むまや
とは男踏歌に云。ことほかなりこそ。踏哥の人を饗應するよし

石山寺縁起画巻
旅の御かり屋の図



て酒或湯漬などを用ることば是を水驛といふ。ことそぎて
簡略なる心也。また飯驛とも匆驛とも云は。ひきをくろ
ひて饗應もなき儀也。踏歌の人に不くをあぐれを。驛路つ
たまくなり。その驛はも馬をはそへしほれど。みなどのり
をくもみな馬はもかしで水驛といふ。又人飯を食し馬
には藁などをかへぞ。飯驛匆驛といふごとく酒肴ざうり
を用ることを水むまやといひ。饗膳を用ゐるを飯驛と名づ
けられしなどいえ。河海抄。弄花抄。一葉抄。細流抄。孟津抄。
林逸抄。紹巴抄。岷江入楚。萬水一露。源氏物語首書。湖月抄。
源氏物語新釋。源氏物語提要。源注拾遺。明星抄。窺原抄。源
語梯。春湊浪話中巻。言塵集三の巻。色葉集下の一巻。歌林

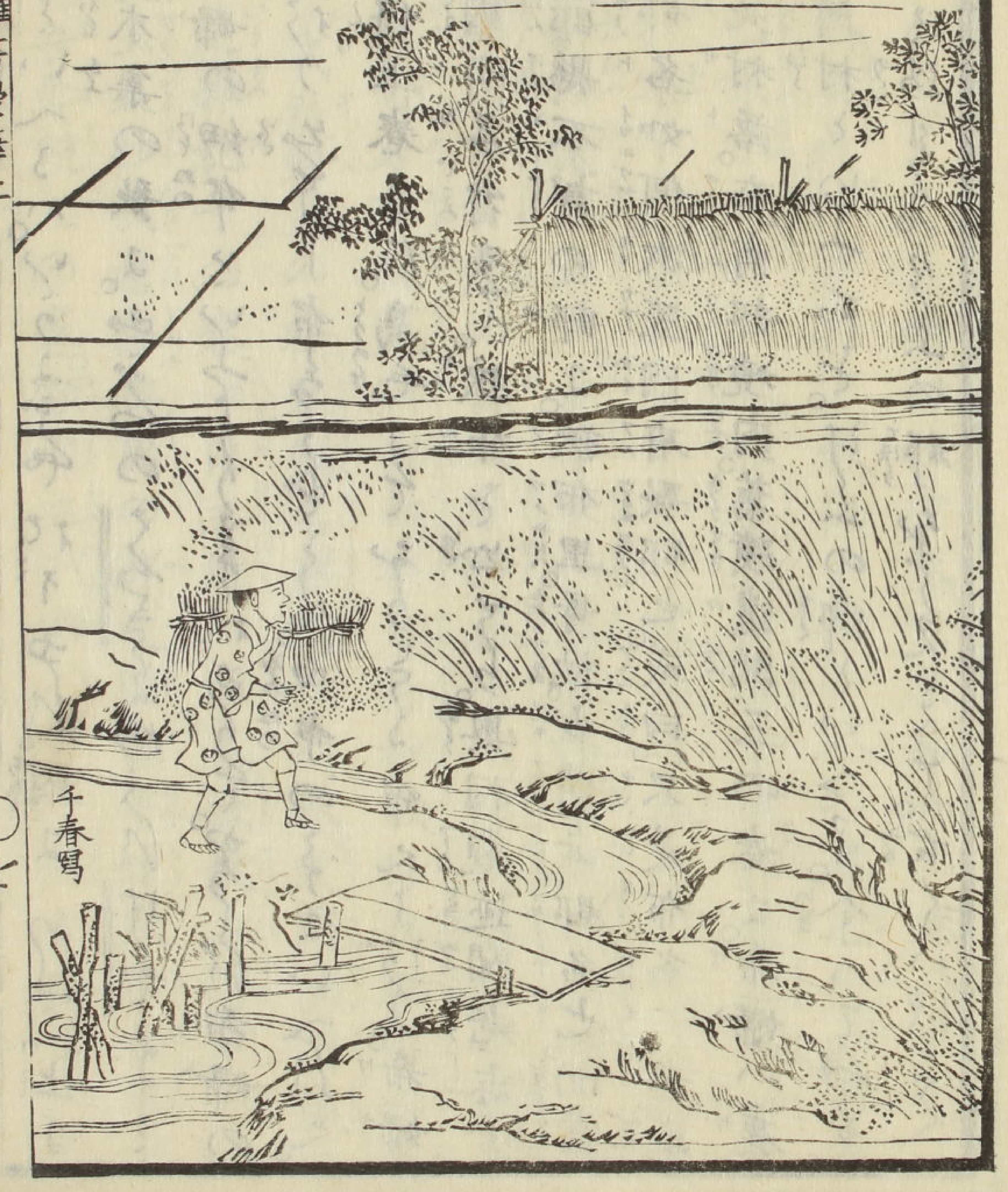
拾葉集二の巻。呉竹集九の巻。倭訓栞美の部上。なほその
かりけれはあまたいへるを考てあるべし。袖中抄七の巻
かつらふきの條に。金吾将軍の合戰出來て國中散〻水驛
となえしは。物れ備なきゆゑ調ざるさまを水驛にたとへしといふ
や。吾妻鏡四の巻に。馬允時經大歴言計ヲ能トシテ。エミ
ラヌ官好シテ。松双ノ庄云不知。アハレ水驛ノ人哉。悪キ
馬細工シテ有カシ。ともいへり。ものもねじて不調人なる
がうへに。馬允といふ名なるをば。とりあはせて誹謗なる
あるべし。ゆすし。山驛。陸驛。傳驛。水驛。浪驛。又桑驛わかちしなるべしといふ
水驛は廐牧令に。凡水驛不配馬處。量閑繁。驛別置船四隻
以下。二隻以上。隨船配丁。驛長准陸路置。義解に。謂船有大

小。故随レ船配レ人。令レ應レ堪行。若應二水陸兼送一者。亦船馬並置之
集解に。跡云。假令卅里之内。有二津度一者。船馬並合レ置。驛長猶
一人在耳。唐六典五の巻に。二百六十所水驛。一千二百九
十七所陸驛。水陸相兼云云。凡水驛量二事閑要一以置レ船事繁
者毎レ驛四隻。閑者三隻。更閑者二隻。菅家文草二の巻。喜晴
少府罷レ官帰レ京詩に。山郵水驛思紛々。雲州消息下の末巻。
太宰帥状に。嫌レ増二欝陶於山郵水驛之蒙霧一。無題詩二の巻。
藤原實範が七律詩に。山邨水驛幾千程。言塵集三の巻に。
水驛とは舟路の驛也。春湊浪話中巻に。令延喜式等にみえ
えたる水驛は。陸驛水驛のこともあやまて。船すて所の
をいふ。東海道の桑名の渡。遠州今切のわたしのごとき
をいふ。呉竹集九の巻に。水驛は舟路のむまやなり 水
驛にも饗のなきこと。よて名とせぬとは水驛と云となり
どもえらばれし。無題詩七の巻。釋蓮禪が著二長門壇一即事
詩に浪驛渉旬猶泛然。とよみたるも水驛におもむきさる
をちくのおろのなま歌人がかけれ紀行に。河崎。神奈川程
が谷。などいへるも水驛といへるはいかゞにふまえぬ
ことし。川崎は水驛ともいふべし。神奈川程が谷は陸驛
なれども因ありて。今は俗語に人の名をよびて
たがひしをり。スヤサレタ。スヤシクワタなどいふを。飯驛
の饗におそぬよしまで。されど水驛の音の轉し。
曽丹集に。山がつのそなれかゝれすまの穂れそびけて

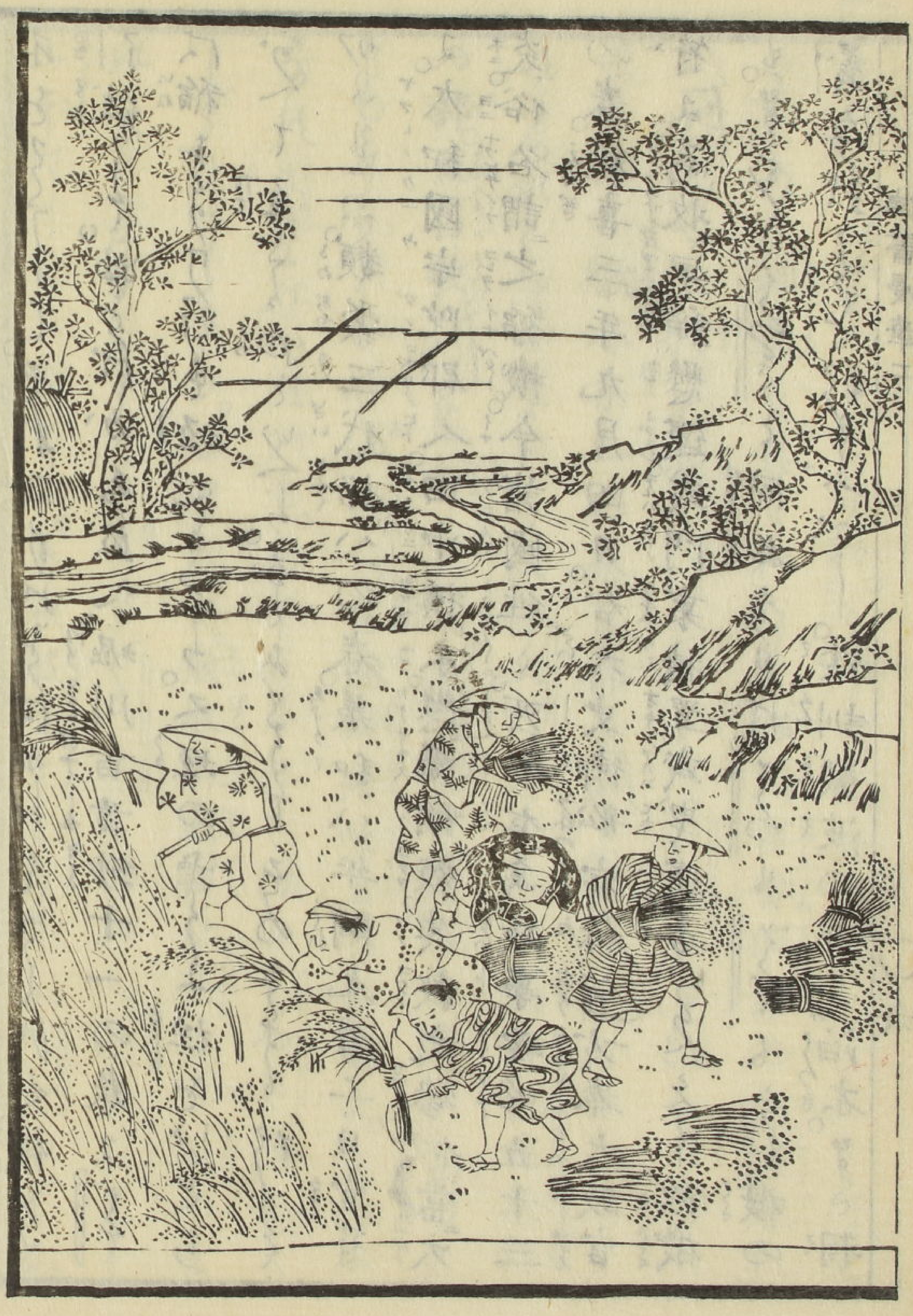
すゑをかけてつのね。といふ歌。異本にはくるにかけて
ともあり。相通て意をなせり。堀川百首田家の部。隆源の歌
に。鶉なくなる稲をほすなはてそとゆいてぞつゝく
うりける。散木集二の巻夏部に。かりのをの垣ねなりけり
みつのわたりはさしてけふとそれれぞ。次郎百首泉郎
の部。菖蒲歌。ぬる衣今ぞそろきにかけてほすそつき
しておよぞれ海士人。空穂物語吹上の上巻に。ころうあ
なれあまれいほども。あすさのけてほそろつき。ほきぐ
しくもほしくら。などゝえ。散木集顕昭が注に。下人の
れなどのけしきしは木を。そろきといふ。枝あれ木を
二本はしらにたてゝ。それ枝によこさまにさをのせなる

木をたてゝ。それにかれをばかけてほしたく。縄をも
ひき渡して。物をばかけほすなり。堀川百首鈔十一の巻にもそ
は稲などのけほすを垣といふ。又垣のやうなる柱をいまち
こへて立てる物といふ。などあるはそのさまもわしく
かなへぬ。類聚三代格八の巻。承和八年閏九月二日官符
に。大和國宇陀郡人。田中搆木懸曝稲穀。其穀之燃似當火
炎。俗名謂之稲機。今諸國往々所在有焉。政事要略五十三
の巻。延喜三年九月四日。右大史御船宿祢有方奉太政官
符に。為收早稲懸運或門裏積置或曳運。などいへし稲機
も。まさしくそろきと同物なれば。そろきとて、それ機の
義なれとこそわるべし。倭訓栞波の部に。泊木。すなはち羽

長谷川等忠が
屛風にゐなこき
稲機の圖此は
三才圖會器用
十一の巻。和漢
三才圖會卅五
の巻農具の部。
などの麥筅も。
まさに八番扞の
類也。清俗紀聞
二の巻ハ。
麦筅と
書るは。
麥筅の誤
りや。京童
六の巻にも
出せり。



千春寫



手の意といへるハ。いくのまぞやてがわれ。因にいふ。上ミ
ひけれ散木集の歌に。山がらのまろきにゆふれけふとよミ
しは。希婦の細布といつよりおりてかゝれ希婦の
里よりおりいだしぞとも。白布のすにいへれく。
俊頼口傳上巻には。鳥毛もてありける布とあり。希婦
は陸奥國の名所にて。狭布を出せり。奥羽観迹聞老志十
二の巻。郡縣不詳の部に。狭布里。哥枕。古傳云。郡名也。而當
國無此郡名如何。衣笠内府歌郡也。或曰。只是布名云云。或
説曰。今此村落。在南部境内。舊蹟遺聞三の巻に。希婦ハ鹿
角郡古河村といふ所と。けふの郷といへり。今ハまだの
の村おく付きり。けふの郡なくえて。古くハをくらく

しきいろと。とくくえ綺語抄中巻。童蒙抄五の巻。八雲御抄
三の下巻。奥義抄中の下巻。袖中抄十八の巻。色葉和難集
七の巻。色葉集中の二巻。歌林良材集下巻。和歌要略抄五
の巻。雑和集下巻。藻塩草十八の巻。呉竹集九の巻。後拾遺
集戀一。新拾遺集巫二。古今六帖第五帖。第六帖。新撰六帖
第二帖。堀川百首戀の部。夫木抄雜十五。陸奥名所寄。類字
名所集。計部。名所便覧。計部。勅撰名所和歌抄出。郡部。松葉
集。計部。武藏野五の巻。東國名勝志一の巻。東國旅行談二
の巻。東遊雜記十の巻。一目玉鉾一の巻。歌枕名寄廿八の
巻。歌枕玉叢抄。抜書。陸奥國の部。文明三年片假名名寄下
巻。郡部。吾妻鏡九の巻。類聚三代格八の巻。隣女晤言一の

巻。などにもおほく倭訓栞計の部にいへれど説にうけられず。
所尊光まさの名は惟恵字を君懐号を柳湾といへれバ。
南宮岳が門人にて今の片岡寛光が實父なり醫業もて
世にきこえし春日寄浪華佐士常詩三首。おなじく前の
詩の結句を次の詩の起句になしてつくれり。其一
に。風光不減昔時春。久背同携舊友人。狂態縦稱無變易。二
毛懶見鏡中新。其二に。二毛懶見鏡中新。却笑氷心誤此身。
只有青樽解幽意。一醒一醉傲清貧。其三に一醒一醉傲清
貧。世上向誰問所親。半夜逢君燈光夢。風光不減昔時春。ま
た歌に らふ そくか かゝゐ を物名にて
さらしたるをばなげうどいぶせのるかやが軒端にちかくそぬれも。



ありあまいつしこえあそね女にとらふ戀まで。
ゑれなまあしとはしさき目めでもむすびてとんらしなきられ。
いきでおりよ。
ねぬるいのやうしくもあるいのありひてぞまほ田のの池のいひんくそれぞ。
桂川地藏記後勘に。天竺青王造立之塔婆。漢家真人變化
之黄石。我朝拘盧尊佛率都婆。日光山寺不動尊。出流之觀
音。岩船之地藏等。皆是靈驗奇特之石像也とあげて。出流
之觀音の旁註に下野國俊野庄岩船之地藏の旁註に。下
野國とみゆ。拘盧尊佛率塔婆。日光山寺不動尊なども
しく旁註ありてんに写しせしなるべし。日光山寺は下
野なるといちじるけれど拘盧尊佛の在所たぽつのあしぴと

とせ余が相摸國築井縣のお藥又ゑまゐりしに。青山村
といふ所より西のかたふ烏屋の蛭が獄とて天雲にそび
えてみえしを。かの獄の嶺に黒尊佛とまうしていく千代
かへけんしられぬ大なる石佛のおはせりと。郷導者のいく
まひは。そをおもふくべや。黒尊佛と拘盧尊佛は音かよへり。
まさてれ記に東國の石像ぶくそれは經にかゐるを
ば。かくさくよしあらげなる。他所にさる石像もを
さくきこえざれども。拘盧尊佛のゆゑよしは。賢劫經第
八千佛興立品第二十一に。佛言拘留孫如来至真等正覚
所生土地城名仁賢王所治處姓曰迦葉父名祠祀施梵志
種所生母字維耶妙勝子曰上勝侍者名覚意智慧弟子名



維頭。神足曰抄兒。其佛身光照四十里。一會説經四萬比丘。
二會七萬三會六萬皆成聲聞。佛在世時。人壽四萬歳。正法
得住八萬歳。舍利並合作一大寺。とみえ。大寶積經第九密
跡金剛力士會第三之二。佛説七佛經。毘奈耶律第五十。現
在賢劫千佛名經。翻譯名義集一の巻。諸佛別名第二など
にみえたるを閲てしるべし。さて神名帳に能登國羽咋郡大穴
持像石神社。能登郡宿那彦神像石神社るぞは。やく神の
石像もみえず。相摸國大住郡阿夫利神社の御正體を石尊
とまうしぞ。たゞの圓石にて像にきざめるにもあらずよしは
きこえず。祈雨のをりにはこれに水をそそぎてまつれば。とこ
に雨かならず出くるとなん。されば。歌枕名寄廿の巻。相摸國部す。

くわらすもどあふり山れ木のりとはたのむものゝひろくぬきぬべきなり。
ともよみて。阿夫利もすなはち雨降の義也。輟耕録四の
巻。禱雨の条に。往往見蒙古人之禱雨者。非若方士然至於
印令旗劍符圖氣訣之類一無所用。惟取浄水一盆。浸石子
數枚而已。其大者若雞卵。小者不等。然後黙持密呪。將石子
淘漉玩弄。如此良久。輙有雨。豈其靜定之功。已成。特假此以
愚人耳。抑果異物耶。石子名曰鮓荅。乃走獸腹中所産。獨牛
馬者最妙。恐亦是牛黄狗寳之屬耳。本草綱目五十の下巻
に。鮓荅生走獸及牛馬諸畜肝膽之間。有肉囊裹之。多至升
許。大者如雞子。小者如栗。如榛。其狀白色。似石非石。似骨非
骨。打破層疊。嘉靖庚子年。蘄州侯屠殺一黄牛。得此物。人無



識者。有番僧云。此至寳也。牛馬猪畜皆有之。可以祈雨。西域
有密呪。則霖雨立至。不知呪者。但以水浸搬弄。亦能致雨など
西蕃にも禱雨石をもちひられど。阿夫利山の神石のご
とくなるはなし。上に引ける桂川地蔵記は上下二巻にて後勘を
添たり。奥書に弘治二年二月六日誌之とあり。新猿樂記
などゝ似たる書まで。考の便とすべきをおほかり。是は
文化十二年三月ごろの事。始て余が手に入れるを。高柳種
彦にかはしつかはしたり。今は輪池翁大田南畝岸本由豆
流。磐瀬醒なども写得て。世に類本すくなからず。
釋了阿は号を台麓とも。一枝堂ともいふ。江戸浅草人に
て。村田氏のぞうし。その家煙筒をあきなふをもてなり

むねとす。いにしへの書よむことを好て。歌
はふるきみやびをしたひ。こゝろをよせて。常に柳をめでゝよ
みけるとぞ。
青柳のいとまうちせばおほかたの春はすぐる何にかへてまし。
古歌の注釈どもに佛書を引るが。なほあまねくよの
なかきをうれへて。佛學におもひをふかうせん。はひまかしら
おろして法師となりぬ。市ふく風の塵をさけて志の居
の北のかたにしたがひ。坂本といへる里に庵むすびけるに。内典の一
切經に。かうやすらひ書寫をきめぐらし。その中にわきて
まひざるをいつかたかみし席をなん。わきわけ所は
さだかなる。書をよみまなびごとに。顯基の中納言のいはく

なよぶ時に虚をうちなきてなげきしつゝかくぞ此
ゆくへしくおもひまよへらはれん心やあるとて。袖をうる
ほころびといふ名をなし。ゆかりの歌に。
あのへとそてはかはせんとても世あきたる鳥の名までぞありけれ。
よよみゐるまでも。それぞれおくはなし。そのゑし。それ
そも今の歌人が。花のゑのまなびのえうきとえすのことばと。
はるかにいふしらまでかきくゝ。すべてひらちあそはぞくも
く人ならんたびには似ば。内典外典にとゞまりてみよろづ
の書どもをよみあまねひはて。うつせこの世と。ものぶのを
このふるきことも。このまで我そるぞ。やんごとなくだ
ふとく。めでてきちゝろぶみすしひなめひすられなる

あれは摘千蘖は標榜を書てよせかへりしが日をへて
後せうそこして。河漏をたてまつりければ。お蔭ぞそれうく
しぬ。

はつしおや寒ざらしなりの名めしたまふ。おはすて
ぬ。そばきりを。さぞうくえねぞ。けでんあぐ給へ
る折。つきおふしも寺へまうづる日なれども。ひるなれ
あつさに。ぞくる折て。夕さりはらいさ。いでゆきてちよ
いくらば。腹もそや。むなしくなりて。かくさまなく
さげられぬ。菜だけやへ。たちもよらんと。おもへども。
を主すゞみ。金毘羅の。腕のほりものゝ。まろくてござる。お
ならびを見れば。てそろしき。たちもよられば。まるもての。



ひだるき腹をかゝへ給く。かくりて いまは。ためはえ
ば。おやつてさきのみ。ぢか君より官ぞしるをぞだ
まはるとききくふ。ちまをとうば立て。寸のてくうじ
ぞ。五六そん。たが義のでとかをあふて。へぞくふぞ。
そのあぢみ世にあひあく。おがえ給く。やゝ人ぞく
ち。つばてのち。ばせうそこをひゝきえてかのまの
いたの。目鼻をとゞめさまふこその。ねもごろさ。それ
かくんてと。おなばゑをを。かばこそむよりこゝいと千とて。
ばかん廬の名の。まぎんは乃。傍のりあれすも そくきり
の。きりくあてたてまつるべし。
下野國の宇都宮まで。めぐらばぞ茶おふくよりくひ

はさへし若宮の歌といふ二諭を蒲生秀實がきゝたもちて。うちひけるに。そのひとつは わかのみやまゐり。
とのびとを。さきふたてゝ。わかのみやまゐりを。
せば。わかみやのぜんぜきれで。ごしよぞみをとゝえ
はけさかさすりて。あけそえければ。いちぐんにょ。
たふにぐふを。たまはる。あかめでた。わかのみやまゐ
りの。ごりあげう。

十六句にうたへり。いちぐんにたふすぐふをたまはる
とは。一國を十二國賜はる義なりや。まよハ。なとといふべきを
訛なり。あは古事記景行の段に。東方十二道とみえしに
よしありてきこゆ也。二すは うすすてがたて。

いとしちをでの。てまでたまのたのこかれいちおふく。
まそみのかゞみが。なゝおもて。にしきおりがやつみ。
しろこがねの。さをさしてこがねのすゞをふらせう。
げにまあとちやうじやれ。じんともすぐる

十五句にうたへり。いとしちをではいとほしき少女の
義之。いとしちは。いとしらまで。いとほしくの略語之ち
としとかよふ例ハ。應神紀の哥に。誰が遠離令在し儴伽
多佐例。阿羅智之万葉集廿の巻に。天地を阿米都之乃。以
都例乃可美乎。またこ阿米都之乃可未尓奴佐於伎なとしか
けるがいとしれかのり。をごのをは。少女のなまよおなしく。
おは本朝文粋一の巻。菅贈大相國の詩の自注に。俗謂貴

女為御盖取夫人女御之儀也とみえ後撰集までいふので。閑院のお。大和物語に伊勢の御若狭の御ひとつきのごなどいへるあり。の人にて。女をさせる詞也。また御児の意としてとききたる㒵今もみられくるの仙臺人は。娘子をよくへくれでいふとなん。あれ二謡八鳥追詞などのたぐひまで。俚言を考解にいと便あり。

下野國宇都宮人。蒲生伊三郎秀實は。號を修静菴といふ。公を中國の古典にくはしく歴史律令の学者なり。山陵志。職官志などのしはせしよ。その説確乎としく千歳のまなびをひらけるといへり。修静菴文集一巻。石田篤が家にひめおけり。九月十三夜。山本信有。石田篤などしりあひて。舟行せし時の狂歌に。酩酊請君笑且休。已期今夜酔忘憂。忘憂在酔歌明月。況復時維屬季秋。皎々晴光十三夜。墨江徐下一孤舟。風来灔々金波動。草痩蕭々玉露浮。両岸連燈幾茶肆。四邊遥野没山丘。嗟吾性癖多奇疾。毎遇區々思且愁。愁到長夜殊増老。半生除此術安求。舟行載月同成酔。酒洗詩腸句似流。灑落胸中無一物。毀譽榮辱謾悠々。まことこの似繪をみてその賛に。たちねに花も似る老のまほ境かとちとせるにおける洞の余が松屋のかゞふみをならしてあそびしかへりひしなよ

糟谷容齋名を昇號を老迂といへるは。北新堀に家ゐし
て醫を業としかたはらやまとの学にもふかくてよゑぐら
うたぞありける文化十一年といふとしの十二月の
ころのは。余をおひそのれことはいろのえて。ことみに身
まかりにき。ひとつのことなしぬ人ありもとうば。そのくれ
しきなくくいそんうつなし蒲生秀實もはるにかどうる
おりて。我らかよぶつひしがそれも容齋にさきだちて。れ
めどしれ七月五日に世をさりぬ。そもそも父母にお
くれまわしせてよりは。師の昔陽翁織錦翁もをなく
さりありしこともど。おくれとまびいでしまて。
いく秋もわすらひわれし松のけふにゆく宵のなかはれる月ばかり。



とちなげくのもしは。文化十一年の秋のけふの比に秋
あそ。余が蔵てみせちあまりふくみのとしすぞあつめける
蜀山大田覃清溪山本正臣梳園岸本由豆流などあつまりて
曽我物語よくよめらかにしに健部氏の古冩本活板本寛
文五年の刊本。由豆流が家の古写本余が家の寛永四年
の刊本。併せの一古写本などれのく異同わかち中に由豆
流がかこよみすらよろしきかなしときかりけり。その本を正臣
がりていきくめち給生の六日了。余が家にて會業せし
日。えまうでこざりきけれど。ひとつくまちもびらりしに大窪行。
柏木昶烏海恭梁卯。などもかつひきてあまにきとうちの
とへひたり。そしてみなは。恩の岡れもえんとて。わかどそうえ

めくりめりしいふ。柏木䂬と梁卿とは。さしものごときをと
あらそひ。ともなは僕ありけき二橋そうりみて清水濱臣
ふゆきはひおいまて吉祥閣の東みれしむしろみりを来
うけ。酒くみかはしなりみ正臣が來たしをはりひ
なく余がよそんぶりし。

前ごとにありもたゞえぬ花の木の一木をいぞその僕まうけん。
はま正臣がいよしを咲くらいはなきしよ。
そくなきてうしとやえみ咲出一本の花の公れ所を。
まる大田覃と大窪行が聯句よ。

十雨五風春暮天　　行

班荊無處不開筵　　覃



對花不飲花應笑　　行

一止干戈二百年　　覃

今の世児童がたそずまり蛙をおあろし車前草の葉を
ねかうく。おんぞてどのくねんとぶらひと呼そやしはく。
そてきまりそぞるふえるまぞらりてよ蛙いきかへりてとび
ゆくまありおは蜻蛉日記中巻ふ山ぢでらでのはそあま
がへるといふ名をはきしまうりけれがかくりみしそう。
おそろさぞはあしでハ方もかどなげりくて「ねかなたの。
朴れは次けやかのはそんちばりしとはあひかへるは。と
いれを解環抄中の十二巻ふ大系の朴れ誤とせしはひ
が事なり。荻原宗固が首書よ。ねかぞたいハ車前草の

和名於保波古。今も童の蛙を殺して其上に此草の葉に
おほひておけバ蛙乃いきかへるは。戯すをもちふるやまずの
神なるによりそ。おかざるもの非ともいへる。なりひかへ
る事蛙をそへてる如なしといへるがよろし。爾雅註疏
八の巻。釋草に。芣苢馬舄。馬舄車前。註。今車前草大葉長穂。
好生道邊。江東呼為蝦蟆衣。疏。薬草也。別三名。郭云。今車前
草大葉長穂。好生道邊。江東呼為蝦蟆衣。爾雅正義十四の
巻に。荘子至樂篇。鼃蠙之衣。生陵屯則為陵舄云云。本草云
云。別録云。一名芣苢。一名蝦蟆衣。毛詩註疏巻一之三巻。
芣苢章に。正義曰。釋草文也。郭璞曰。今車前草。大葉長穂好
生道邊。江東呼為蝦蟆衣。埤雅十六の巻。芣苢の條に。或謂

之陵舄。以此列子曰。若䵷為鶉。得水為𧄍。得水土之際則為
䵷蠙之衣。生於陵屯。則為陵舄。陵舄車前也。或謂之蝦蟆衣。
證類本草六の巻に。車前子。一名蝦蟆衣。本草蒙筌一の巻。
草部上に。車前子。又謂蝦蟆衣。本草綱目十六の巻。隰草類
下。車前の條に。蝦蟇喜藏伏於下。故江東稱為蝦蟇衣。本草
和名六の巻。草上に。車前。一名蝦蟇衣。倭爾雅七の巻。艸木
門に。車前。蝦蟆衣。同。伊呂波字類抄六の巻。於部に。車前草。
或車前子。蝦蟇衣。謂之ーー。山東呼為牛舌。江東呼為蝦蟆
衣。書言字考六の巻。生植門に。蝦蟆衣。時珍云。蝦蟆喜藏伏
于下。故名。物類称呼三の巻。生植の部に。車前。野州及奥州
にて。かへるぐさといふ。本草啓蒙十二の巻。車前の條にカヘ

ルバ南部。カヒルバ仙臺。などいへし説どもあり。これよし
あるさておほばこての神を欽明紀廿三年の條に。調吉士
伊企儺が妻大葉子あれば。そのころ霊をまつりしにも
やとてわかれまど。くはしくは。萩原宗固が説のごとく蛙に
用て神妙の効験ある薬なれば。神とはいへるなるべし。
おほばこといふ名義は日本釋名草の部に車前大葉なる
ゆゑ也。又はたけ字也。東雅十五の巻草卉の部に。おほば
ことは大葉子也。和名抄釋義廿の巻。草木の部に。大葉子。
葉大故なりとぞいふ。大和本草六の巻に。車前大葉小葉二種
アリ。大葉ハ穂二三尺アリ。本草ニ大葉小葉アル㕝ヲイ
ハズ。とあれば。大葉小葉といふべきをもぶける語なりや。

（十二）

又ハもとおほしさなどのこはおなじくて草にいふ一
種の名までもあるべし。上の説撈海一得上巻にもひとしと委くしるべし。
おくやまといふ俗語ハ。似て非なる物をいへり。曽呂利狂歌
咄四の巻に。丹田山紬を荊安ぞよふしろうとのし。とな
まば。この丹田山紬が體ハさながらの紬に似て性のおと
なるよしにたとへしなるべし。

（十三）

太秦牛祭繪詞一巻あり。奥書に。右九月十二日太秦廣隆
寺牛ノ祭ノ祭文也。惠心院源心僧都ノ作ト云云。應永九
年九月十二日ノ夕書之とみえたり。詞を真名と片假名とを
まじへてかけり。また天文十八年の写本に。真名ばかりにて
かけるもあり。繪ハいとめでたくて當時を考べきこと多し。

牛祭画巻風流の圖。
此画巻の寫本は。
都鄙に所蔵せる人
あまたにて珍しからねど。
刊本なきがゆゑに今
その一節を抄寫す。

千春寫

都名所圖會四の巻滑稽雜談九月の部上などにも此祭文と
挙られど文を畧せるかうつる平假名まじりに書かへてそれ真
面目を失へり。今二本を校合せて。全文をこゝに載。

謹請再拜。
謹啓須。維南瞻部洲大日本國。歳次仁應永九年無射
十二乃天。朝日乃豊登里。夕日乃豊降坐須中仁。銀
花栄金仁實結。天門開支。開天地戸。和合留之今夜。當寺
乃當僧。四番大衆等。誠乎二花乃嶺毛與里高之志。乎五葉
乃底毛與里深天之。恒例不闕乃勤天止之。摩吒羅神乎敬祭之奉
留事。安里神明乎祭留波。招福乃計止古。靈鬼乎敬布波。除災乃
基也。上波梵天帝釋。四大天王。日月五星。廿八宿。七曜

天左二字滑稽雜談作天中二字

三辰九禽下波。炎魔王界。五道乃太神。泰山府君。天左
宇司命。司禄。別波天當所鎮守。三十八所。五所護法。飛来
天神。部類眷属。惣波天日本國中乃大小乃神祇。田中仁波
稲積袮止毛。山仁波荒袮止毛。榎加本。木之加良藤乃森。嵯峨乃奥。奈留一
拳打波礼天聽加加天。宇左以辻々乃道祖神。家々乃大黒天神
乃袋持仁至留迄。驚之言而白久。夫以婆性乎乾坤乃
氣仁受介。徳乎陰陽乃間仁保知。信乎專仁之。佛仁仕へ。
愼乎致天之。神乎敬。不天尊地卑乃礼乎知里。是非得失
乃科乎辨留。是偏仁神明乃應恩也。因茲單微乃幣帛
乎捧天。敬天以天。魔吒羅神仁奉上須。豈神恩乎蒙良左
哉。曰茲四番大衆等。一心乃懇切乎抽天。十列乃儀

式乎学比万人乃逸興乎催須以天自神明乃法楽
仁備戸諸衆感嘆乎成乎以天暗仁神乃納受乎知止
也然留間拎提頭仁木冠乎戴支久波比良尺仁舊鼻
高乎給付鐵牛仁荷鞍乎置支痩馬仁鈴乎付天駄毛
有里踊毛有里或波鞍八仁大間乎詰天仁加美或波
鞍仁尻瘡乎摺剥天悲毛有里企波誠仁十列乃風流
仁似里止雖毛躰波唯百鬼夜行仁異須奈良如此芸乃振舞
乎以天摩毛羅神乎敬祭之奉留事偏仁天下安穏寺
家泰平為也因之長久遠久拂比退支悪僧者先三面乃
僧坊乃中仁忍入天物取留世古盗人女奇怪須和以
布和以也小童毛止木々乃奈里物取礼止明障子打壊留



骨奈左法師頭毛危覚留拯波安多腹頻病風仲嗽
疔瘡癰瘡間風殊波尻瘡虫瘡膿瘡安布美瘡冬仁向
戸留大眼並脾咳病鼻多里癰心地癲狂擇食傳尸病加
之鐘楼法華堂加波津留美讒言仲人闘諍合乃仲
間言貧苦男乃入多介里無能女乃隣行又波堂塔多乃
檜皮喫貫大烏小烏女聖教破留大鼠小鼠女田乃畔
穿土豹如此異類異形不道無慚乃奴原仁於天長之
遠久根乃國底乃國迄拂比退久戸支者也。

按ずるに應永九年といへれど源心僧都の時代にかなはねど。
そは僧都のたくみし文を用て年毎に年月の名を
あらため改むるなれぞさなるべし。

（十四）賀川玄悦が子玄子産論一の巻に或問男女之辨余答曰不知也。問左男右女之説曰非是也。凡孕皆當任而居中爲物所壓則左右側其右者兒之頭居焉左者児之下身居焉。といへり。さて右俗説に左孕右孕といふは本據なきことゝしとてすてべからずや。又は修行道地經一の巻。五陰成敗品第五に。其小兒在母腹中處生藏下熟藏上男兒背外而面向内在於左脇也。女子背母而面向外處在右脇也。阿毗達磨倶舍論九の巻。分別世品第三之二に。若男處胎依母右脇向背蹲坐。若女處胎依母左脅向腹而住。若非男女住母胎時。隨所起貪如應而住。瑜伽師地論二の巻。本地分中意地第二之二に。又彼胎藏若當爲女於母左脅倚脊向腹而住。若當爲男於母右脅倚腹向脊而住。となむあるてきと佛説にも見えたるなり。

（十五）俗にひこれありて小唄に謗あり。かゝるなりと呂氏春秋五の巻大樂篇に。非人非不歌也。狂者非不武也。とみゆ。

（十六）大和國唐招提寺の金堂の鵄尾の銘に。此御堂元亨三年癸亥春三箇月之間。成上葺畢。以此次同六月候西方鵄作賛之。作者壽王三郎大夫正重とあり。この三郎大夫は法隆寺のちのにそとゞまりすむ瓦工がことはつれやありしとぞ。

（十七）京都空也堂の叩鐘の銘に。天曆十年伊丹住貞俊作とあり。今もあ。あく空也上人のおとたかせて鑄させ給ひしとし。

摂津國伊丹の里より。廿町ばかりて西北に。鋳物師村あり。昆陽のちかきわたりなれば。昆陽寺の鋳物師が子孫など。世々こゝには住けらん。

盃のをりひざし　おもひどり　よまどり　なかひざし　なかのみたけざし　などいふは。太平記十の巻。高時自害の條に高重云云。舎弟ノ新左衛門ニ酌ヲ取セ三度傾テ。摂津刑部大夫入道道準ガ前ニオキ。思指マウスゾ。是ヲ肴ニシ給ヘトテ云云。同廿九の巻。松岡城周章の條に。厩侍ニハ、赤松信濃守範資上座シテ云云。イザヤ最後ノ酒盛シテ自害ノ思ザシセントテ。大ナル酒樽ニ酒ヲタヽヘ。銚子ニ盃取副テ云云。義経記七の巻。平泉寺見物の條に。くまのやかうそこのおりひざしせん。いせの三郎もちそしよいでのまん弁慶などゝ云云。曽我物語六の巻。とらが林十郎にさし條に。おもひざし　なをもひどり。その後とらんぶなする云云。たゞし　めにんせくく　おもひざし　とゝすへ。さましこそゆるされん次云云。すけなりをのぞとりあげて。そばてのみしなまかしんおとゝらすざれよ似たり。これをばなまへまといふ。義盛咲て。んざしみ　よまどや　おほつかなりいうぞをるべき云云。かやうれ　なかひざし　そば。よびてへきるこさじりれを云云。同巻朝夷と五郎ちからくらべの條り。そのさうびき　おもひどり　すうけん云云。七の巻母が勘当ゆるされし條に。五のさかづき　おもひざし　ふせん云云。

くるしかれやと師匠はそのさきだちては。かたはらに肴のまゝに
なるぞ云云。八坂塔祐経が庭のさかへゆきし条に。すけつね
さかづき持参しまして。十郎はかしこまりければ云云。
狂月房狂歌百首雑に。のむ酒もへらぬ中のなかいざし
かへつたものまでおもふなるそのれ。今川大双紙下巻に。主人
貴人なとの御前にて。中あいをすまして作法は肘をつきて、
片膝を立て出ていづこの次しく左のてを付きて。右の
手にて盃を執て呑でおさめて。相構て少も下座せざる
物なり。天正記二の巻に。次第くにおさくをすへし。みぎ
まあひにまちかく。そでのつまひざし。ちんちんかんかい。
山のごとく前はなれ云云。東海道名所記一の巻に。酒汲て
てきげざしにあかでのまば云云。諸國獨吟集下巻に。てきげざ
しになぶさ〳〵のさきのこのげ。又なかひだしは色せど色にさ
ぎしてあまてみちびいとなかすれべきなれ。今はあらも
ひすたるをあぐ。また和田酒盛冊子に。ひざのうへもなり
そのためにこそなのまてるやのくさ。猿源氏冊子に。すそ
さうのづきさ〳〵れてもせんなし。宗五大草紙上巻に。十度の
ことは。たとくみて十人九くみて盃を十付にさうく。中間一
人盃と銚子とを取てそじめはせまうしさて次の人に
はしてまく人にてうしをさうれべし。扨又次の人めこそ
前のごとく次べし。まわり酌之盃を請取てうち銚子を人
まへうしはま。物をもいまだ肴をもくはず口をもぬぐふ

座のうち若き人ありあまれば。とかくしとてのませら
るゝ盃は人の器用によりて三ど入。白土器などにても
よろし。ひなの物ずきにて見およびたる事なし。かはらけと
おなじの盃は。あひれ物などの。ふさやかくたるべし。又
十度めこの盃にくは酒の入る程墨を付る。呑とは両人
ならべてともいとくおもしろき事を勝とする。盃不定とは一露さへ
酒をのこさずのみて。あとの紙をすてたる人は一露にても、とがめて二
度とも落ては曲と。又落の落たる盃は曲なり。又一文
字とは。是もあふるまで一文字を引たる下にうけて
でなくて文に。又あるなき線で一文字までのみて其二
の呑様大事。山桃呑とは盃のうちの山桃をのこして飲

そてよりかくれ之。今川大双紙下巻に。梅の花の盃をのむ
様。左の方よりめぐりて初の盃をのみ入て其盃をなれ
折に置て皆順にのむべし。さて後に中盃を呑なれ。
とあるも左より呑て。又云児女房男の酒ふるまひ。児女
房を下へさげ盃し。男は盞を物げくし是は酌取は盃を
ぐるまに持してありぬれ之。出盃を持してのみおけり。ひきよ
うがし候けん。又云あさむかへしの盞のみ。先ハ七返ま
ではすべし。八返まで世に云々。家中竹馬記に。着座ありて
初は次第に末の紙順盃とすることありてさて乱
盃となりたる事もあり。酒飯論造酒正長持申様に。上戸
のすきなれ。たとひやしき膝を組。その杯をまうく

三度も五度もすゝめぬれば。わさび。小漬き大茶わん。黒塗白
ぬり朱ぬりなどいろいろの大合子おりひくなど
めぐらし。あるは呑ほし。一口ばかり。そのゝちはまづほさる
猪の口呑いと手さし秋も嵯峨野の菊かさねて。あるは薄茶
うちかはし一文字凝濁なしのふりのめを。そばざしにつ
ぎし。ちぐくばし。思ひ数うけとのおもひざしてくり肴
の色々よそほひを抛やられ。ひき出物管絃乱舞。小拍子
立舞。居舞。東舞。今様。古柳をうたひ。神楽催馬楽其駒と。
猿楽物まねいろくに声をかざり骨折力をつくしさわぎたて
おもしろかりけれ。いうなれそうげなのある時も。ふざけ
きらいふしも。するげなるをいてんやうる。さこの盛大なるは

めでたき事ありて祝のある時は賀酒とてさけをすゝむ
ぞめきむ。上戸は酒にまさしひ。つよきよびしと下戸もせ
ども。うまずさきはたる貪福は下戸のたてたる蔵もなし
なども、えしまつて作じはれ。すゝてほの目を十ぶんにさは
はり酌とかさし。の盞。うぐひす呑ひとつ絞一文字やまも
とれ杯のもれ盃。さかずきの盞盞さずれまはして盛しぬあと
わうむがへしの盞おゆんさいらんもち。よえ。あまれく
ひとくちのみ杯花のみたけ。ふりつりふりさのめき
そばざし。ひやざし。ちぐくざしなどいれ名あれどおもふべし。
國語晉語二に。中飲優施起舞と。いふるは酒宴中に立て
舞し事にて。中呑とは殊に中呑は今俗にスケルといふ

てをかけり。

十九 海野璦は字を君玉号を蠖齋といふ庭瀬侯につかへたるに
して在職三十年文化十年に老を養はんことを請て職を
辞。幼時より詩文書画をこのみ特にかしこき人の趣をえて。
山水の画をよくし次に今は花鳥に月雪に心をなぐさみて。
東都の名流を友としあそぶ。嫁猫詩に。自愛女奴如弄璋。
而今受聘嫁鄰莊。貪家元是無奩具。鈴索綿茵共一箱。

二十 宮本璆は号を東莊といふ。常陸潮来人。山本信有が門
人にて学者のきこえあり。蟬の詩に。露宿風餐清可憐。樹
陰高處早秋天。寄言引得螳螂斧。為是繁聲聒外邊。

廿一 宮澤達字は上侯。号は細菴とも詩仙樓ともいへり。武藏國
秩父人にて詩は名あり。今は江戸日本橋南油町に家ゐ
す。林下烹茶詩に。永晝如年不易消。携茶林下去逍遥。此中
高致人知否。擔雨松風破寂寥。

廿二 磐瀬百樹は字を鐵海号を京山とも。又涼仙堂ともいへ
り。鼓刀のわざにもすぐれて。よく中國の古印章を辨知
倭漢印章譜。倭漢花押考。などあらはしてまたくさ〴〵のふみをよ。
稗史をつくれること。あまた世にしらるゝそれ学は道に。
書に画に。名あり自画賛の詩に。江畔秋蘆風吹香輕花如
練曬清光漁舟撐出月明裏驚起群鷗白渺茫。

廿三 片倉鶴陵女子のことをあらはしぬ。文化八年。歳六十一にして始て
男兒羊之助をうませつ。この兒幼して聰明なること世にならびなし。

なりし文化十三年の五月ばかり。かれやむごとなき殿
の御前にめされて出てたまはりし詩は倉氏神童甫六
齢正能誦讀稱寧馨蒙求草訣辨疑及朱子家訓三字經そ
れ後聞八月にはすでに孝經大学をもよみをへぬ。松屋
主人いへらく。余このごろ桃郎傳を讀で神童猪良堅が
あるをしれる。ゆゑその家名は世ひさしく。あまねくおほ
人なくしてふうはをりて。天神の人物をそなへしめしと
いふものし。鶴陵老くにもよくこそかゝずず。口にい
はるゝをいはず。しかるよしその事をつたへて絵だ
けるはこれひとつ家の良藥秘法をもかくはずして。
梅癘新書。傷寒啓微。産科發蒙。青囊瑣探。保嬰須知。腫脹彙



篇。などの書にかはあらはしつ。奇兒ごとの名にはれぞ
しもたゞしの小縁のちぞなりけん。時あれこのもしくあることのもし
岸本由豆流は字を大隅號を椎園。なるは尚古考證閣と
いへり。わが師翁のまだ世にいましゝて。やまひの床まれ
きかし事のよかど。そがしえて織錦齋の門に入て学の道
をとふ。今は圓珠菴雜記後撰集標注よりして。そのあら
はせる書數十部にあまれりしあらんは。書肆萬笈堂が近代
名家著述目録六の巻に出たれしにくはしく。齢ばて
はつかしこそだちにもそれぞしそをなで著述に富はいま
しへみる今の人なれも。またためしなくや。その父は永膺から
やまとにまなびて。あまたの書を藏せらりしに。加ふ由豆流

が学を好なりて。すでに文庫の書数三万巻にぞありけり
ころ歌よむこともよくよみて。かが中に。初花を。
飛どもよみしをきくに。初雪ていづれ一きはく山桜の花く。
雲雀を。
くらべてしげ中のなにかげるみえてあがるハ初つのひばりなれ。
十五夜月。
月こそがけれたれにみちてもみえずやなれあかくまよしぬ野の秋のひとよ。
峰紅葉。
そうしるて夜らりせば此一本かぎもえうもハこう林の紅葉。
寄遊魚。
うちとけて好きれ秋すれあまたの遊でまぐしぶしハさげきそのかし。

醫師安田一菴は。名を源躬弦。号を棗本とし利。賀茂季
鷹縣主に学て。和歌のよくよめる人也。そのかの名ハ
若沖といへりしたのん。そのあとはせの草根部類の抜書。
曽丹集の標注などをさへ名所花をよめる歌は。
次のこれらハ浪まつゆきのやまの山口かけてあらしまう。
人につけのまつびしおをわくれとて。
をあどのわとこやびんの中までのほ待べきあふぬ尓して。
喜多村節信は字を節信号を筠居として学和唐をされ
て。あまねく世にきこゆ。此のころ岸本由豆流が家まき
てくん人おのくそれの説をそなへりてたゞしく十家説
叢といふ書なりぬ。余も飲食のふあるにまはしおく。

むしろよつゑあしらはゞ節信の説をもつてさとるべし乃
うり。その金と玉とはあるひはたまをかげてひかることゝい
今ま梓よはあるらん日。世人閑て知べし。春曉看梅詩
に鷲起金雞三唱晨分明夢裡見佳人覚来空照梅梢月剰
馥残香記得真。
禅林類聚廿巻ハ類書之輪池翁の所蔵本の巻端に。揚州雍熈禅
寺住持嗣祖比丘道泰天寧禅寺首座比丘知鏡集とみへ。
凡例の末に貞治六年丁未解制日。幹縁僧希杲重刊于京
臨川寺とありしより南畝老翁が家に。于時天正十四丙
戌梅月端午本末書写畢と奥書せし古写本もあり。まづ
岸本永胥が文庫に。四喜管蒼集の古写本四巻あり。一名



禅林類聚音義といふ。自序に。余至于六十六歳丙辰之春。
有客従容謂余曰禅林類聚二十巻之内畧纂其難字解之
余曰我従幼年以来守不立文字之旨不知閲肆之術況及
老年者稀而前後亡失不獲考字書何以解之乎哉雖然如
是以吾昔之惑測今之懇子暫侍有日矣客退而乃考諸
部之字書以精記之誠是以管見測於蒼々而縮類聚二十
巻作茲書四巻而象四喜云云。弘治丙辰小春下浣日見龍
山主。紫陽之信及前遯老禿半雲序とみゆ太平記音義な
どに似たれどそれの書也。
篆隷萬象名義写本三十巻あり。輪池翁の跋に。弘賢嘗讀
弘法大師作書目録。有篆隷萬象名義三十巻。而不知其存

上余固勤于小學求之有年于茲矣。享和元年冬稲山秋月二公以寫本見寄云原本藏于山城國高山寺其部首始一終亥。一依說文玉篇至於音訓與二書互有出入。不知當時據何書數十年聞其名而不得見者一旦獲之吾不忍文庫榮莫加焉十襲以藏源弘賢踴躍歡喜識とあり。

後漢書宦者傳に嬙媛侍兒。歌童舞女之玩。充備綺室。狗馬飾雕文土木被緹繡皆剝割萌黎競恣奢欲とあるは雛遊雛道具。みな此類之。秇苑日渉六の巻。民間歳節上にみゆ。國語。舊事紀。などを引ていへり。さりとて旧事紀は偽書なるおくしよにひけるは舊事大成経のうちにて。いとちかきころ世にはやり出し。たゞしからぬ書なれば證としがたし



し雛遊のゆゑよしハ。骨董集にくはしく辨じあれバ今ハ贅せず。濱松中納言物語二の巻に見えたるをむかしとすべき。史記孝武本紀に。有司言雍五時無牢熟具芬芳不備乃命祠官進時犢牢具五色食所勝而以木偶馬代駒焉。獨五帝用駒行親郊用駒及諸名山川用駒者悉以木耦馬代行過乃用駒他禮如故。とあるは。今の木偶の神馬にひとし。延喜陰陽寮式御本命祭の條に馬形五十疋とも見ゆ。

相模國鎌倉郡瀨谷村の妙光寺は日蓮聖人一宿の靈場といへり　日蓮聖人註畫讚第三十則入滅の段に弘安五年壬午九月八日午剋出身延澤宿下山九日大井十日曽祢十一日黒駒十二日河口十三日呉地十四日竹下十五

日開本十六日平塚。十七日瀬谷十八日入于武藏國荏原
郡千束郷池上村右衛門大夫宗仲屋。とあれ瀬谷のやど
りはあらざるべし。さて釋迦牟尼佛善大夫といふも
のゝ建たるよし寺記に見ゆ。釋迦牟尼佛ハ。節用集活板
本上巻。仁の部名字門に。釋迦牟尼佛丹波。同書下巻。美の
部名字門に。釋迦牟尼佛坂東とあれば。あしよくミクル
べしと訓べし。蓑輪軍記下巻に。釋迦牟尼佛歎負尉陶賢と
いふもあり洪鐘の銘に。武州恩田霊鷲山松栢萬年禅寺
者。行基菩薩草創渉歳時也久矣云云。于時正中貮年乙丑。
三月十七日萬年禅寺住持比丘道周謹題。大檀那菩薩戒
弟子廣鑑。また。南贍部州大日本國中。相州瀬谷郷住藤原



朝臣山田伊賀入道經光雖執倍て利潤貨本主依置流之。
為大檀那奉寄進妙光寺矣于時宝徳四年壬申卯月十六
日大工和泉守恒國とありて。さてより境川をさかひ
て西北の方二町ぞうしにて。深見の里あり。そこに伊賀入
道が城蹟あり土人一の堰れ城山とよぶ。深見の里は高
座郡に隷て。神名帳に深見神社見え和名抄郷名の部に
も載たる所也。深見神社を今は鹿嶋大明神とよべり。そ
を鹿嶋の大神と同體にたてしまつれるにや。

擁書漫筆巻第二終